

くらしにやさしい街 … 志木、よりよい環境を未来に残すために

エコシティ志木通信

12月 1日 (No.56・炬燵が恋しい号)

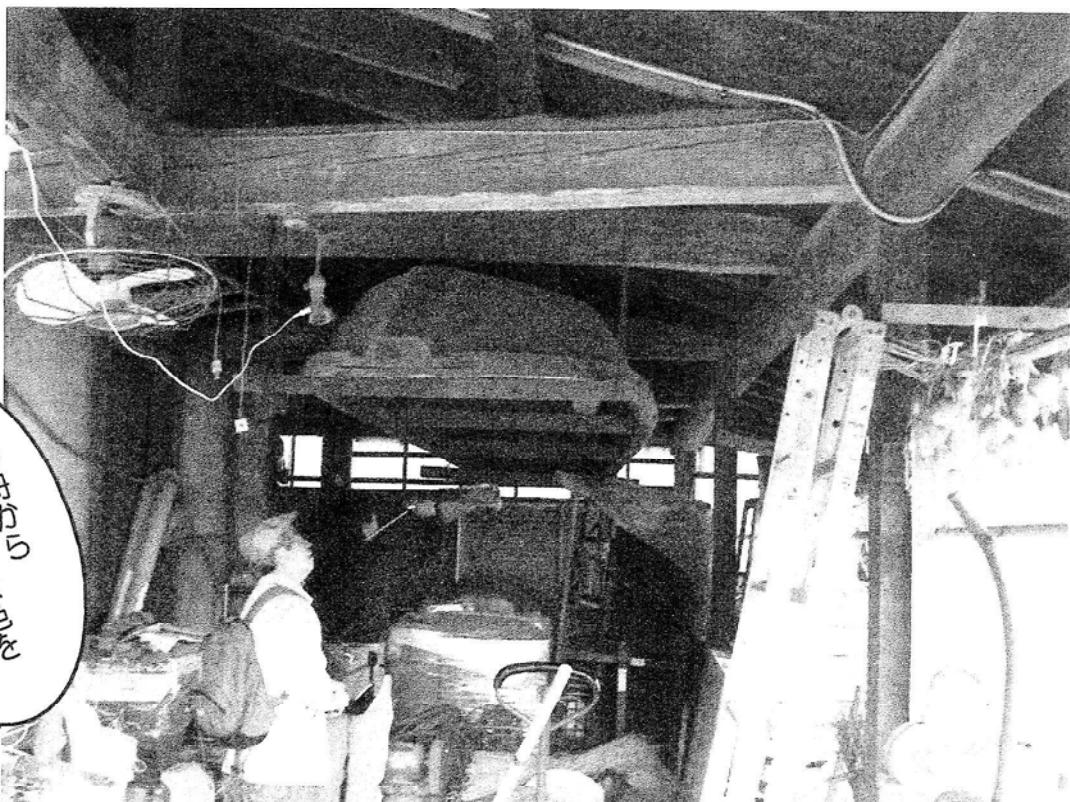
2009
＊
12月

NPO法人工エコシティ志木

代表理事 天田 真

〒353-0006 埼玉県志木市館 1-1-2-108

<http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>



写真：毛利将範

勝手にレッドデータ of 志木 (42)

舟

宗岡地区では、かつて洪水に備えてたいていの家に舟が用意されていたそうです。水塚の調査をしていると、今でも長さ5mほどの舟を物置の軒下などに吊り下げてあるお宅があります。昭和22年のカスリーン台風のとき、念のため舟で本町まで避難したとか、水をかぶって「エグミ」と呼ぶ粒子の細かい泥がついた稻の穂を洗うときに使用した、などという体験談を伺いました。長い年月軒先に吊された舟、今でもまだまだ使えそうでしたよ。

(毛利将範)



9/6
(日)
9/13
(日)
10/4
(日)
11/8
(日)

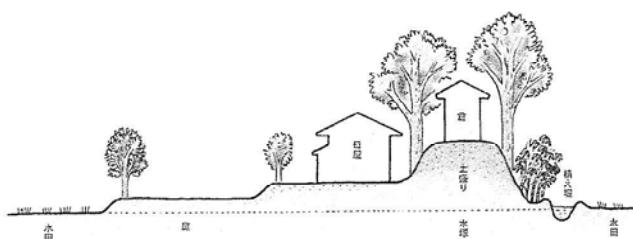
惣園堤と水塚の文化に学ぶ事業 水塚の調査を行っています

生活協同組合ドゥコープ市民活動支援金助成事業

武藏野台地と荒川低地が接する地点に位置している志木市には、江戸時代よりの治水に関する遺構が豊富に現存しています。

たとえば、江戸時代初期に造られた村全体を囲む輪中堤（惣園堤）、江戸時代に造られ明治になってレンガなどで改修された樋門、江戸時代から大正・昭和にかけて築造された水塚などです。

当会では、都市化された宗岡地区に今なお50基以上も残るこれら水塚を、先人の知恵が生み出した「川の恵みを得つつ川の脅威と闘い、日常の豊かな暮らしを保証するシステムの象徴」ととらえ、他団体などと協力しつつ、今年度から2年計画でその利用実態などの調査を行っています。



水塚の構造イメージ図

○調査の方法

調査自体が、一般の人々にも知ってもらえ、さらに治水資源の案内人（語り部）を拡大・継承する機会となるよう、調査員を一般から公募し、今までに4回、計16軒のお宅を訪ね、現在の水塚の利用状況や水害の記憶などをヒアリングしました。



調査員によるヒアリングのようす

○これまでにわかったこと

訪問したお宅のほとんどが江戸時代初期から続く旧家で、宗岡地区の歴史的重みを実感しています。

以前は、水害に備えて穀物や衣類など貴重品を保存し、いざと言う時には避難する場所だったが、現在では本来のそうした目的はほとんどなくなっているという現状のようです。

ただ、ヒアリングを続けるうち、水塚という施設を媒介に、昔の暮らしや先祖の記憶が今にありありと生き続けているのも事実であり、水塚がそのお宅にとって非常に重要な存在であるということを伝わってきました。

今回訪問したお宅には、避難用の舟を納屋の軒下などに吊して今なお所有しているお宅も想像以上にありました。

また、多額の費用をかけて母屋と水塚を保全改修し私設博物館のようになっているお宅もありました。



昭和になってから建てられた水塚

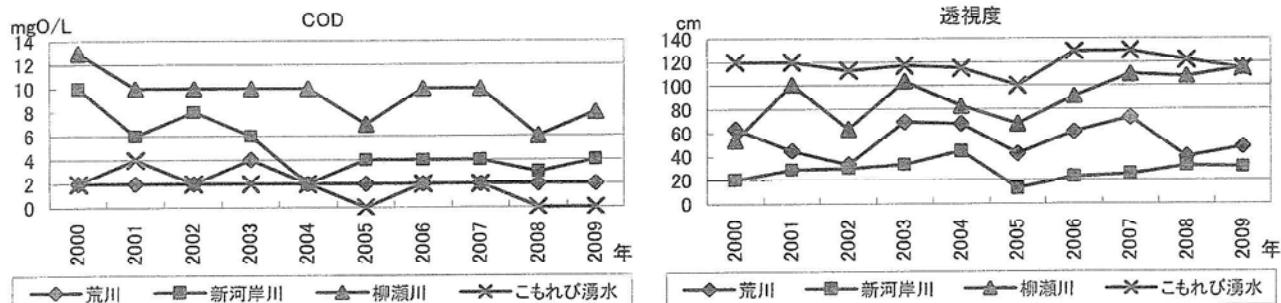
○今後について

以上の調査による成果を、来年度は、まちかど展示・出前講座・報告書出版などにより地域に還元する事業を行う予定です。そして、それらを、景観・環境・文化的価値、将来の治水・まちづくりに活かすという視点から考察し、地域の魅力を活かした「志木まるごと博物館 河童のつづら」活動の具体的な展開につなげたいと考えています。

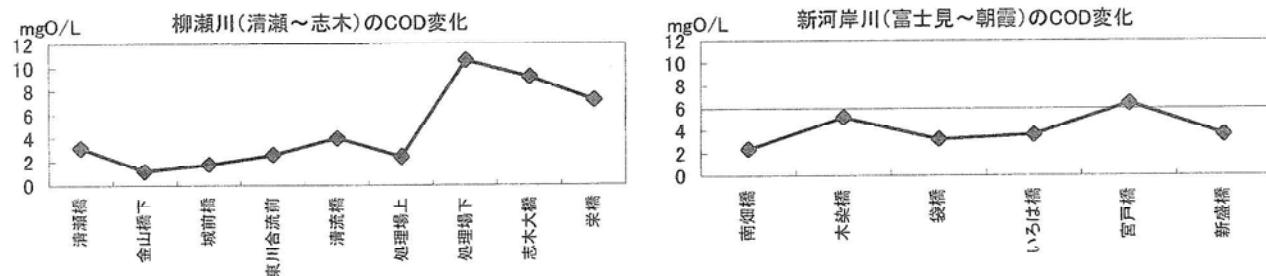
（毛利将範）

*前号に掲載した「身近な川の一斉調査」のデータの一部が欠けていましたので再掲載します。

■ 河川と湧水の経年変化(柳瀬川は志木大橋と栄橋、新河岸川は袋橋といろは橋の平均値)



■ 流下に伴うCOD値の変化(04~08年の平均値)



※ 柳瀬川では東川合流前と清流橋の間で東川が合流し、処理場上と処理場下の間で東京都の下水処理場の放流水が流入する。

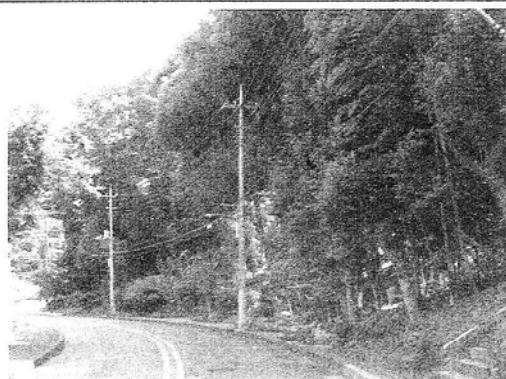
※ 新河岸川では南畠橋と木染橋の間で富士見江川が、いろは橋と宮戸橋の間で柳瀬川が合流する。

また、宮戸橋と新盛橋との間で荒川の秋ヶ瀬取水堰からの水が隅田川の浄化用水として流入する。

斜面林の手入れと自然観察 ~西原ふれあい第三公園でも作業を始めました~

昨年の8月から志木市の公園美化活動会制度に基づき、いろは親水公園こもれびのこみち斜面林の手入れ作業を行つてきました。月に1回の一般へも呼びかけた作業と、概ね週に1回の巡回・ごみ拾い・軽作業で、当初1年間は長年投棄されたごみの搬出が主な作業でした。これからは下草刈りやシュロの伐採等の作業も増やしていきたいと考えています。

一方、今年8月より、西原特定土地区画整理地区内の斜面林が「西原第三ふれあい公園」として区画整理組合から志木市に移管されたのを機に、この管理にも公園美化活動会制度で取り組むことになりました。西原斜面林は、以前、市が地主さんから借地していた頃にも市のクリーンボランティア制度で手入れ作業をしていましたが（2002年12月～）、その後区画整理組合の管理になり、また、公園整備工事が進むに伴



西原斜面林

いー昨年の冬から手入れ作業を中止しており、今回約1年半ぶりに作業を復活しました。西原斜面林は場所によって整備状況が異なり、東上線寄りの、私たちが以前から作業をしていた部分は外周部を除き工事から除外されていましたが、南西側に進むにつれ工事の手が多く入り伐採された木も多く、一部では全面的に伐採され、造成された後、新たに植樹した部分もあります。これからは徐々に安定した自然な斜面林になるように創意工夫をしながら取り組んでいきたいと考えています。

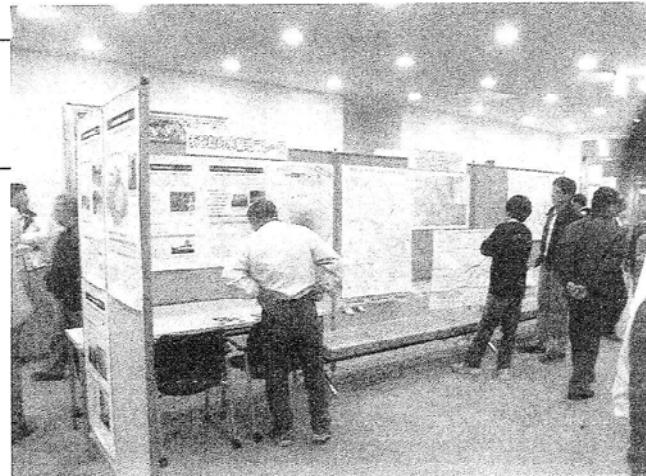
ところで、どちらの斜面林も作業に参加するボランティアスタッフを求めています。イベントカレンダーに掲載されている月1回の作業の他にも、不定期ながら週1回以上の作業をやっていますのでお問合せ下さい。 (天田 真)

11/14
(土)

新河岸川流域フォーラム2009

このフォーラムは、総合治水対策を含めた健全な水循環形成の意義・重要性等について、広く一般の方に理解を深めてもらうことを目的に、川づくり活動への参画、行政と市民・市民団体間のコミュニケーションの活性化と連携を深めるため、新河岸川流域川づくり連絡会と新河岸川流域総合治水対策協議会の主催により毎年開催されています。

新河岸川流域（柳瀬川流域等含む）は、急速な都市化により田畠や緑地が失われ、雨水の浸透・保水する場所が減ったことから、降った雨が下水道や河川に一気に流出するようになっています。また、最近はゲリラ豪雨と呼ばれる集中豪雨も増えていることから、街中に水があふれだす危険性が高まっており、一方では雨水が地面に浸透しないことで地下水の低下や湧水・河川流量の減少などにもつながっています。こうしたことから、今年は「ゲリラ豪雨からまちを守る、清流でまちをうるおす」をテーマに、11月14日に東京都東村



山市で開催されました。

群馬大学院 片田 敏孝 教授による講演「最近の豪雨災害に学ぶこれから地域防災」では、これまでの行政主導による防災対策の限界・弊害から、これからは住民による「主体的な自助意識」の醸成、「災害をやり過ごす知恵」、「命を守る術」を身につけることの大切さをお話しいただきました。

帰りには、東久留米・ホタルを呼びもどす会 菅谷さん、朝霞・黒目川に親しむ会 小林さんとともに、北川かっぱの会 三島さんのお店で、流域間交流をしてきました。（伊藤智明）

今年の外来種（アレチウリ・オオブタクサ）駆除作戦

今年の大型外来植物の「アレチウリ」と「オオブタクサ」の駆除作戦は10月12日をもって終了しました。

今年は5月3日を第1回にほぼ毎月計7回実施した他、富士見橋～高橋の先までは天田代表が折を見ては地道に抜き取りを行ってきました。

私達もここ数年駆除を行ってきて、効果的な作業時期等のノウハウを身に付けましたが、千曲川河川事務所のホームページに分りやすく掲載されていますので一部引用いたします。

「アレチウリ」は、5月～10月の間に、たくさん雨が降った後に芽生え、8月～10月にかけて雄花で作られた花粉が昆虫によって雌花のめしべに受粉し、9月～10月にかけて結実します。果実は数個集まってつき、果実には鋭いトゲが多数あり軍手を通してしまいますので、果実がつく前に刈り取ることが大切です。

■抜き取りのポイントは

- 出来的だけ小さいうちに抜き取るのが容易で、覆われるまで放っておくと大変。

2. 一年に数回抜き取ることが大切で、6～7月に駆除しても放っておくと土の中に残っていた種子からまた芽生えが出て、これを駆除しないと結局繁茂してしまう。

3. 土の中で発芽せずに生きている種子が翌年以降に芽生えて繁茂する事があるので現れなくなるまで数年間続ける。

4. アレチウリは一年草なので落とす種子を減らすことが効果的で、種子をつける前に抜き取る。

5. アレチウリの駆除後、周辺のオオブタクサなどの競争力が強い外来種が繁茂するので、周りの外来種も抜き取る。

長野県では、アレチウリを駆除するため、毎年7月の最後の日曜日を「アレチウリ駆除全県統一行動日」とし、駆除を行う民間団体、市町村、県等が連携して、県下各地で駆除作業を行っています。

志木市でも、私たちの活動だけでは限界がありますので、ぜひ市を上げて駆除に取り組んでもらいたいと思います。（山崎光久）

出前講座 小学校の総合学習や市民大学等の講師をしています

志木第三小	3年生	柳瀬川	9月15日
志木小学校	5年生	柳瀬川	10月 9日
宗岡第三小	5年生	柳瀬川	10月15日
志木小学校エコクラブ			9~11月に5回
江戸川総合人生大学			4月24日
大東文化大学 環境創造学部			9月29日
志木柳瀬川ロータリークラブ			11月20日
富士見市民大学 環境講座			11月21日



志木小学校の出前講座風景

総合学習の時間に実施している柳瀬川の環境学習は、柳瀬川左岸（富士見市側）の志木中の対岸付近で実施しています。鳥や植物については河川敷・堤防・田んぼを回りながら学習します。

魚捕りは人気がありますが、柳瀬川の護岸は基本的にコンクリートで、魚が捕れるのはコンクリートの上に土砂がたまり水際に湿地性の草が生えている場所に限られます。こうした場所は少ないので、志木小や志木三小などの児童数の多い学校の場合は場所の確保に苦労します。

捕れる魚はヌマチチブ、ウキゴリなどのハゼの仲間が多く、他にはモツゴ、ギンブナ、ドジョウなど。また、ヌマエビ科の小エビはいくらでも捕れ、テナガエビやザリガニ、ヤゴも何種類か捕れます。

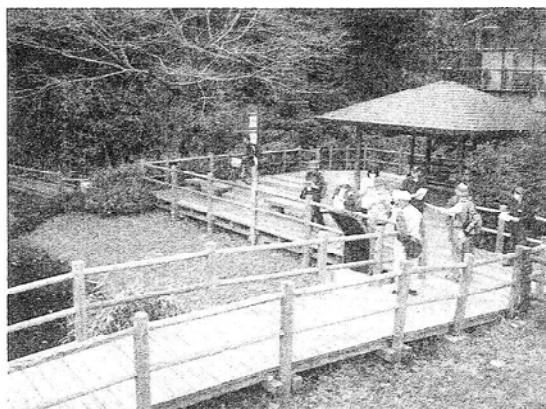
大人向け講座の講師も時々依頼されています。当会の活動事例や市の環境施策について、また、新河岸川や柳瀬川を例に、水の循環、総合治水、川の環境、外来植物等のテーマで話しています。

（天田 眞）

11/1
(日)

志木ぶらり散歩 新河岸川周辺の水に関わる歴史を訪ねて

《新河岸川広域景観プロジェクト 景観かわ歩き 志木・富士見エリア》



当日は日中暖かな晴天で絶好の散歩日和になりました。

今回は、当会と（財）埼玉県生態系保護協会の共催に加えて、埼玉県都市整備部田園都市づくり課の「新河岸川広域景観プロジェクト」の参加メンバーも加わり約50名の参加になりました。新河岸川広域景観プロジェクトというものは、和光市から川越まで舟運で栄えた新河岸川沿いでよい景観を掘り出し残して行こうというもので、今回は志木の町を当会のメンバーが案

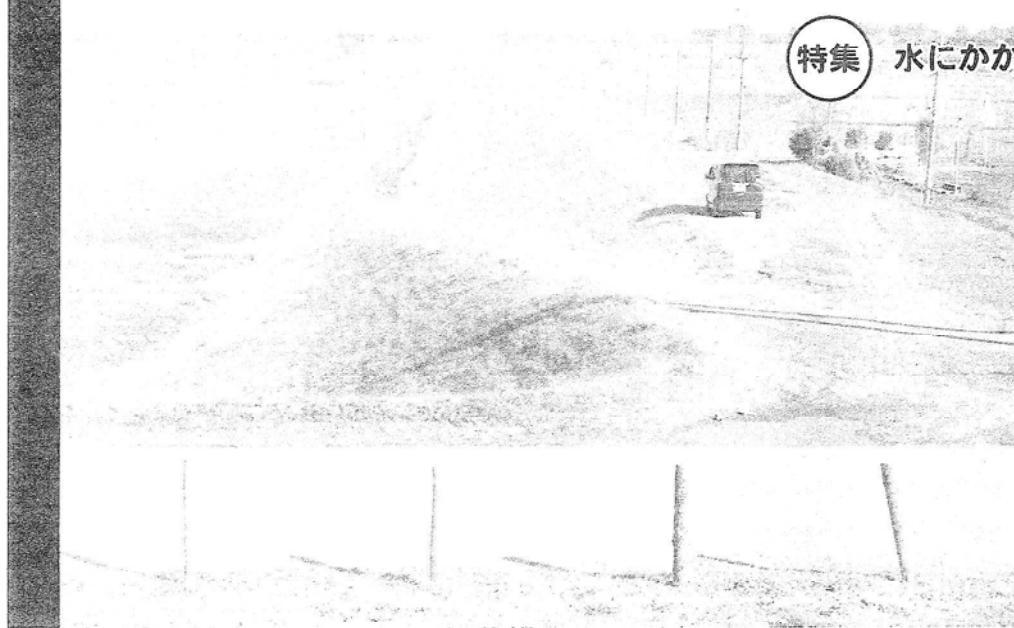
内をしました。

参加者は「志木ぶらり散歩マップ」を片手に、市場通り→敷島神社と田子山富士塚→こもれびのこみち斜面林→富士下橋→引又河岸跡→→レンガ大枠→野火止用水いろは樋の模型→旧村山快哉堂→江戸・昭和・平成の三代の堤防→水塚と屋敷林→北美垣樋→佃堤→新河岸川の旧河川等を見て歩き、説明を聞いて、「良い景観」「残念な景観」「景観資源」等の評価をしました。

「良い景観」としては、こもれびのこみち斜面林、江戸・昭和・平成の三代の堤防や水塚のある農家住宅等が、「残念な景観」としては、史跡などの説明板がよく見えない、いろは樋の模型の隣の石のいすが木が邪魔で座れないなどがあげられていました。

参加者からは、「志木には素晴らしい歴史があることを知った。ただ、歴史的な建物や治水遺構が文化財に指定されておらず、今後失われていくことが心配」との懸念の声が多くありました。

（山崎光久）



↑ 広い水田の中の横堤を、荒川の堤防から眺める
高さは4mほどで、建築当初の記録では長さ510.55m。

羽根倉橋と秋ヶ瀬橋の間の荒川堤外（荒川堤防の川側）、水田やグランドが広がる広い河川敷のほぼ中央に、荒川に向かって伸びる堤防があります。これが「横堤」です。

堤防はふつう川に並行して築かれるのですが、横堤は川の流れに対してほぼ直角に突き出しています。日本では荒川だけにみられる堤防で、上流からの洪水流を受け止め下流の被害を軽減することと、流速を減速させ河川敷や耕作地を保護することなどを目的とした堤防と言われています。

近代河川改修で誕生した横堤

「堤防はふつう川に並行して築かれる」と述べましたが、実はそれは明治になってからの近代改修以降のことです。それ以前は、洪水から守らなければならぬ村などを囲むように堤防を築くのが治水の基本的な考え方でした。宗岡地

区には江戸時代初期に造られた村全体を囲む輪中堤（この地域では「惣囲堤」と呼んでいる）が今でも残っています。

明治40、43年と続いた大洪水を契機に、明治政府は「臨時治水調査会」を設け、抜本的な治水計画にのり出します。

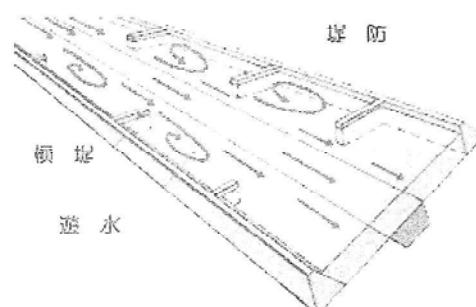
岩淵水門（隅田川と荒川の分岐点）から下流では、大正2年（1913）から昭和5年（1930）にかけて新たに約21kmの荒川放水路（現在の荒川）を開削しました。

岩淵水門からの上流部では、蛇行していた川を直線化するとともに、それまでの人の住むところを堤防で囲むのとは逆に川全体を堤防の中に閉じ込める連続堤を大正9年（1920）から昭

志木まるいと博物館「河童のつづら」担当

**毛利
将範**

荒川の横堤（よこてい）



洪水を受け止めて流れを緩やかにする、横堤の仕組み図
『荒川読本』荒川上流河川事務所より

↓ 荒川上流改修工事平面図

大正7年から始まる荒川上流の改修工事区域は、赤羽鉄橋から大里郡武川村（川本町）に至る62.3km、入間川筋の比企郡伊草村（川島町）地先の落合橋から本流合流部に至る5.9km、新河岸川筋の北足立郡新倉村（和光市）から岩淵水門に至る11.1kmだった。
『荒川上流改修80年の歩み』より



和29年（1954）にかけて築造しました。この時の改修工事で、川の中に農地を残したままの広い川幅で堤防が造られ、また、川幅の広い部分に横堤が造られ、ほぼ現在の荒川の姿となりました。日本一広い川幅（最大で2.5km）と横堤は治水上で荒川の大きな特徴となっています。

昭和初期に造られた宗岡の横堤

横堤は、北吉見から戸田市の彩湖南端部の間で、左岸（さいたま市側）に14、右岸（志木



「宗岡第二号横堤」の先端部
鉄塔は、不法投棄監視用のカメラです

市側）に12、計26カ所に築かれました。

志木市内には、先ほど述べた荒川堤外の中央にある「宗岡第二号横堤」の他に、羽根倉橋の志木・富士見市側に現存する「南畠横堤」と、秋ヶ瀬橋の志木側にかつてあった「宗岡第一号横堤」の3カ所に築かれました。「宗岡第二号横堤」は昭和4年（1929）に着工し、昭和6年（1931）竣工、他の2カ所も同時期につくられ、26カ所のうち宗岡堤外にある3カ所が最初に完成しています。

横堤の機能

松浦茂樹氏（東洋大学教授）の「大遊水地帯の成立と暮らしの知恵」によると、明治10年代の荒川中流域には大規模な雑木林が点在しており、その下流側に耕地や集落がみえ、水害の防備林だったことが分かる。防備林は洪水の流速を緩和し、大きな土砂や流木を止め、肥料になる細かな土砂だけをゆっくりと流す。大堤外地に暮らす人々の、洪水と折り合いをつけて暮らすための偉大な知恵であるこの防備林が、横堤の原型になったと考えている、と述べられています。

川を直線化し連続堤を築いたことで、それまで荒川中流域全体が果たしていた遊水機能が低下しました。それを補うために、防備林を原型とする横堤が川に突き出すように築かれ、洪水流を広い河川敷に貯留する仕組みができあがりました。資産が集中する首都東京などの下流域を洪水流から守る新しい遊水機能、それが荒川の「広い河川敷」と「横堤」により確保されたということができます。

【参考文献】

- 安斎達雄「荒川独特の治水施設横堤を考えるー」『郷土志木』第34号(志木市郷土史研究会 2005)
『荒川上流改修80年の歩み 澄(みお)』(建設省荒川上流工事事務所 2000)

金子秀樹の農業日記 <4>

今年の我が家家の稲刈りは、8月27日と28日に行いました。

当初、9月5・6日を予定していたのですが、台風11号（9月1日頃）が近づいていたため、稲の倒伏や水没を懸念して早めに稲刈りを行いました。結果としては、あまり台風の影響が無かつたのですが。

今年の稲刈りは、順調そのものでした。理由は簡単で、8月に入り雨が殆ど降らなかったため、田んぼが乾燥し固く締まっていたのでコンバインが動きやすく、トラブルも発生しなかったためです。昨年は、稲刈り前に周期的に雨が降ったため、田んぼがやわらかくコンバインの車輪が滑り動きが遅い上に、穂が湿っていたためコンバイン内に穂が詰まり修理をしてやっと稲刈りが終わりました。昨年の稲刈り時期は、どこの家もコンバインの故障が多く農機具屋さんが大忙しでした。また、稲刈り後のコンバインの掃除も昨年は、コンバインの下回りの泥落とし・内部に残った糀の除去・機械の乾燥。。。と大変でした。

が、今年は、コンバインに泥が殆ど着かず、残った糀もすぐに取り除けました。糀の乾燥も昨年より一回当たり4~5時間短かったです。

しかし、今年の稲作が全て順調だったわけではありません。今年の梅雨時、晴れが少なく梅雨明けが不明確で7月末頃まで雨や曇りでした。そのため、今年の稲が伸びてしまい、通常、人の腰程度なのが胸元まで伸びてしまいました。我が家では、稲が倒伏しませんでしたが、堤外の一部の田んぼに倒伏が見られました。

私が本格的に田んぼを始めて4年が経ちましたが、こうして見ると、稲作は天候に左右される作物だと思います。これは、農作物全てにいえることですが。尚、我が家今年の稲作の出来は、昨年とほぼ同じ収量で検査でも一等米でした。また、今年の宗岡地区の米も全て一等米でした。

稲刈り後ですが、年内は1~2回田んぼの耕作をする程度で、本格的には、年明け2月末の野焼き以後から始まります。それまでは畑作中心となります。

この時期、我が家で作っている野菜は、大根、ブロッコリー、ほうれん草など一般



稲刈り風景

的な野菜です。他の家と違った作物としてコンニヤクイモと大豆を作っています。

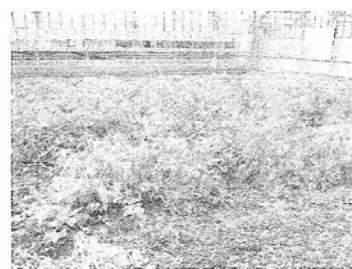
コンニヤクイモは、丸い部分がコンニヤクイモ本体でイモから伸びている棒状のものがコンニヤクイモの子です。このコンニヤクイモの子を3年（500g~1kg程度）植え替えして、やっとコンニヤクに加工できる大きさになります。コンニヤクイモは、当初興味半分で数個買ったのですが、毎年子が増え、今では50個以上になり、来年は全て作付けするか思案中です。

今年の大豆は、農薬の散布が出来なかつたので虫食いだらけです。後で大豆の選別が大変そうです。（通常は、1~2回行います）

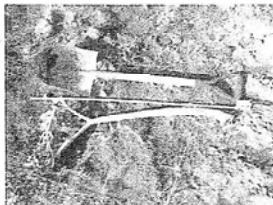
コンニヤクイモは、コンニヤクに加工しておでんなどに、大豆は、煮物などの料理にして食べます。コンニヤクイモをスーパーなどで売っているコンニヤクに加工するのが、また大変なんです。



大きく育ったコンニヤクの葉



虫食い大豆畑



20cm以上あるコンニヤクイモ



小芋付きコンニヤク

●志木 自然イノフォメーション●

生き物情報は Tel/Fax 048-471-4275 Email : qwj11624@nifty.com(毛利)へ
ホームページ⇒<http://homepage3.nifty.com/moh/kappa/sizen-info.html>

《鳥類》

ノビタキ(♀1) →9月20日(日) 水谷田んば。柳瀬川Wで【山崎】
エゾビタキ(1) →9月20日(日) 旧ワイス前の斜面の屋敷林で【柳瀬川W】
コガモ(4) →10月4日(日) 柳瀬川・栄橋上流右岸【山崎】
オオタカ(1) →10月18日(日) 柳瀬川上空。カラス4~6羽から執拗に追われていました【毛利】

オナガガモ(2) →10月18日(日) 柳瀬川。オスの冬羽です【山崎】

マガモ(♂1・♀1) →10月18日(日) 柳瀬川【山崎】

ハヤブサ(1) →11月1日(日) 朝9時、志木市幸町の東京電力の鉄塔の上で、3~4羽のカラスとバトル【毛利】

《ほ乳類》

タヌキ(2) →10月4日(日) 柳瀬川・栄橋上流右岸。旧ワイスの前で。アレチウリの下に巣穴らしい穴が二つ見えます【山崎】

《は虫類》

スッポン(1) →9月20日(日) 柳瀬川(旧ワイス前) の洲で甲羅干し中【柳瀬川W】

《両生類》

ヒキガエル(1) →9月22日(火) 柳瀬川・志木大橋下流右岸。アレチウリの下から【天田】

《昆虫》

ニホンミツバチ →9月22日(火) 柳瀬川・志木大橋下流右岸。アレチウリの花に多数【毛利】

《甲殻類》

モクズガニ(1) →10月18日(日) 柳瀬川。志木中前【柳瀬川W】

《魚類》

雷魚(カムルチー) (1) →10月18日(日) 柳瀬川。1923~1924年ころ朝鮮半島から奈良県に移入され各地に広がった外来種【柳瀬川W】



☆会員状況

2009年度更新済み会員（11/24現在）
個人正会員 50（内新入会員1）
団体正会員 2
賛助会員 3（内新入会員1）

★本会の財政基盤は、
会員の方の年会費が
頼りです。



★今年度も継続更新
をよろしくお願ひし
ます。

★宛名シールに会費の有効期間が
書いてありますので、チェックし
てください。

■当会の団体正会員

志木おやこ劇場
生活クラブ生協志木支部

■当会が参加している、または主な

協力団体

いろは遊学館利用者の会
グループばんぽこ
(財)埼玉県生態系保護協会志木支部
志木おやこ劇場
志木市コミュニティ協議会
市内小中学校
新河岸川水系水環境連絡会
柳瀬川流域ネットワーク
新河岸川流域川づくり連絡会（国土
交通省）

情報満載！
当会のホームページ

公式ホームページ

<http://www.cc.e-mansion.com/~eco/>

志木まるごと博物館「河童のつづら」
<http://homepage3.nifty.com/moh/kappa/>

志木市立郷土資料館の 農具 その9

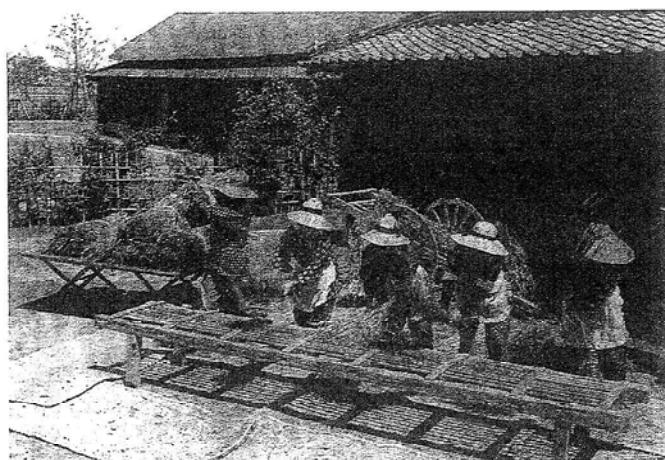
ムギウチダイ



ところによっては「サナ」とも呼ばれ、小麦の束を台に打ちつけて脱穀、脱粒する。ムギウチダイは、センバが普及する以前に使用されたもので、形状は全長2m30cm、幅60cm程の山形の横木が等間隔に渡されており、高さ60cmぐらいの4本の足をつけた木製の台状のもの。長さいっぱいに、60cm幅の山形の横木に裂いた竹を2枚重ね、9本を等間隔に釘で打ち付けたもので梯子状を呈している。

作業は、4、5人が同時に並んで麦を台に打ち付けると、麦粒が竹の間から下に落ちて脱穀される。

当館のものは、長さ3m90cmあり、比較的大きいもので6～7人で作業ができた。



麦打ち－埼玉県さきたま資料館での再現風景
『いまに伝える農家のモノ・人の生活館』大館勝次ほか、柏書房 2004

【執筆・撮影協力】
志木市立郷土資料館

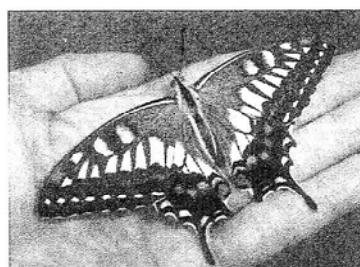
〒353-0002中宗岡3-1-2 ☎ 048-471-0573 月曜日休館

街なかの自然が次々と減っていき、身近に昆虫を目にすることが少なくなっていました。そんな中でも気をつけねば様々な昆虫の生態を観察することができます。今回からそんな身近で見られる昆虫について連載します。第1回は月並みですが昆虫図鑑のはじめに出てくるアゲハチョウ科を取り上げます。

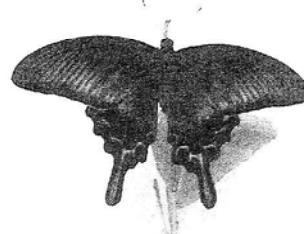
志木で見られるアゲハの仲間とその代表的食草（幼虫の餌になる植物）は次ぎの通り。

アゲハの仲間	主な食草
アゲハ (ナミアゲハ)	ミカン、サンショウ等、 ミカン科の樹木
キアゲハ	ニンジン、パセリ等、セリ科の草
クロアゲハ	アゲハと同じミカン科の木
カラスアゲハ	コクサギ
ジャコウアゲハ	ウマノスズクサ
オスジアゲハ	クスノキ、シロダモ等、 クスノキ科の樹木

アゲハとキアゲハの成虫は黄色の地に黒の筋模様でよく似ていますが、幼虫の姿は全く



キアゲハ(アゲハも似ている)



カラスアゲハ



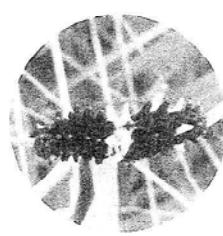
ジャコウアゲハ



アゲハの若令幼虫



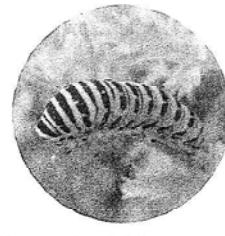
カラスアゲハ



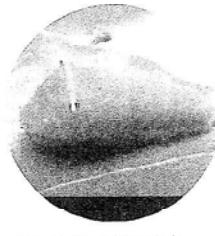
ジャコウアゲハ



アゲハ(クロアゲハも似ている)



キアゲハ



アオスジアゲハ

街で出会える楽しい虫たち

異なり、それぞれの食草の上にいるときに目立たないような模様です。また、アゲハの若令幼虫は鳥の糞に似た姿です。

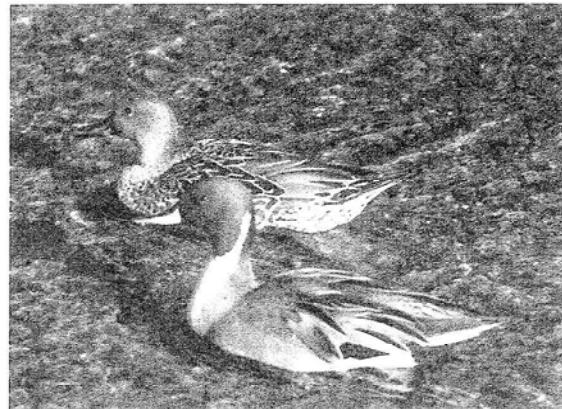
一方、クロアゲハの成虫は真っ黒でアゲハとは全く違いますが、幼虫はアゲハによく似た姿で食草も同じです。

カラスアゲハの成虫はクロアゲハに似ていますが羽根の表は緑色に美しく光ります。食草のコクサギはちょっとめずらしい木ですが西原斜面林にはかなり生えています。

ジャコウアゲハの成虫も黒色でクロアゲハに似ていますが、幼虫は他のアゲハと異なる形で体中に突起があり、サナギも独特の形です。食草もちょっとめずらしいウマノスズクサという草で、堤防など日当たりのよい草原に生えています。

黒地に太い青い線が一本入ったアオスジアゲハは他のアゲハに比べて敏捷に飛び回ります。食草のクスノキは造園用の樹木としてよく植えられるので街なかで増えているといわれます。

オナガガモ



オナガガモは柳瀬川周辺でも代表的な冬鳥で、9月中旬頃から繁殖地のシベリアあたりより渡来し始め、翌春は4月下旬ころまで滞在します。

オスは、スマートな体型で特に尾がピンと長く、それが名前の由来となっています。

カモの仲間は一般的にオスが特徴的に目立つ色彩で、メスは茶色っぽい地味な色をしています。オスの目立つ羽色は「繁殖羽」または「夏羽」といい、つがい形成する時期や繁殖期の羽をいいます。カモは一般的に越冬中につがい形成するので晩秋に換羽して冬期に夏羽（繁殖羽）になります。

オナガガモのオスも渡ってきた当初はメスのような地味な模様ですが、次第に白と黒のおしゃれな模様に変わってきます。



10/18のオナガガモ♂
(写真: 山崎光久)



換羽中です

20年以上前は、新河岸川と柳瀬川の合流点に1,000羽近くの群れが観察できましたが、現在では、合流点から柳瀬川を約2km上流に上った志木大橋の間でも50羽前後から10羽ほどし

か出会わなくなりました。代わって最近では、わりあい開けた水面と低い草の土手を好むヒドリガモのほうが多くなっています。

柳瀬川周辺で、かつてオナガガモが多数飛来し現在でも群れが観察できるのは、特に、新河岸川と柳瀬川が合流する地点、柳瀬川駅近くの富士見橋上流、志木大橋あたりの3カ所です。

これらの場所は、実はかつて10~20年くらい前まではアシがまとまって茂っていました。

例えば、柳瀬川と新河岸川の合流点。ここではかつて盛んに餌付けが行われていましたが、それにも増して合流点や川の両岸の水辺、右岸の斜面林ふもとの湧水地に背の高いアシがまとまって茂っていました。富士見橋上流も7~8年ほど前までは河道が蛇行し小さな崖とアシ原がありました。また、志木大橋ふもとの左岸側、富士見市の台地からの水が流れ込むあたりには今でも小さなアシ原や藪があります。

オナガガモは、かつての東京・上野の不忍池やハクチョウ飛来地での餌付けに群がるイメージが強く、実際餌付けによく慣れるカモです。しかし、新しいカモが定着し健全な世代交代をおこなうためには、ナイーブなカモも安心して身を隠したりエサを探すことができるよう、水辺に背の高いアシなどが茂る環境と少し入り組んだ多様な地形が必要なのだと思います。

△ほぼ月1回のペースの水塚の聞き取り調査もあと1回となりました。
△インタビューを終え、「この年まで生きていたので、皆さんにお話ができる。ありがとうございます」と言われたときは、この調査をやって本当に良かったと思いました。
(ふくろう)